

幕末明治の写真師列伝 第一百七回 宮下欽 その二十九

「二月廿八日 終日時雨

一、第九時宮下事務局へ金子請取に行、不残受取三井組へ行、切手と金子引替、夫方愛宕下へ行、旧冬宮下借用之金子[四拾両返]済致し、松崎氏へ立寄、龍之口と焼木格之代金遣し、午後第六時頃帰宅ス、第八時武助私用ニ而外出シ午後第七時過帰ル、松蔵第十二時箱館方又重手船二見丸之船頭来リ、外ニ一人来リ右同道ニ而真松寺へ行、夫方深川紀の国屋内又兵衛殿方へ行、夜泊ス、吉五郎へ細工代之内拾円遣ス、同人午後第九時頃帰宅ス、彦太郎午後第一時頃外出シ同第五時頃帰ル、善太郎第九時過弟子一人引連来リ、下屋之普請終日致ス、○例之通、休ニ付先生方一同へ牛鍋ニ而御酒被下候、」

「第三月三日 曇小雨降

一、第八時半宮下事務局へ行道、牧野氏へ立寄、夫方中清へ廻リ、バランス代金相払、事務局方過日請取過之七百両之内三百両返納致シ、残り四百両ハ今般御用ニ付、薬品[等]相求候所へ払遣候故、差当り金子持合無之ニ付、御日延願候所[金子]二重取ニ相当、甚難相済相済候得共、無余支次第二付何日ニ上納ニ相成候哉、右日限迄之日延書差出候様御沙汰有之ニ付、奉承知之旨挨拶致し午後第一時帰宅ス、[○]第十一時頃柴山氏夫婦ニ而蒸菓子一折持参ニ而来ル、[菓子・茶出シ]写真致ス、同人へ双眼紙写真六枚、為土産遣ス、午後第二時前帰ル、○第十二時頃岸田氏来ル、菓子・茶出ス、午後第四時頃帰ル、○玉松へ忍ヶ岡之家賃二円遣ス、○青山氏へ事務局写真天神ニ而焼方致し節、万端世話ニ相成礼として金二拾円遣ス、○松五郎殿兄弟并栄蔵殿へ右同局写真中手伝之礼として金二拾円遣ス、○楠山氏同第四時過来リ、同第五時半頃帰ル、○松五郎殿同第四時過来リ、同第六時前ニ帰ル、其節前[文]之目録遣ス、○青山氏同第三時半頃来リ、無程帰ル、[○]同第六時横浜石野清七殿より郵便来ル、過日先生御頼置ニ相成居候ポンプ、二拾三両と言直之所、拾八両ニ直(値)引致させ、手合金五円遣し、一兩日内ニ引取候約束ニ致し置候間、御出可被下と之大意なり、尤手附金五円之受取切手封込来ル、○楠山氏へ今日双眼之目鏡玉一对并一寸五分計之玉一ツ貸遣ス、○松蔵午後第八時過入湯ニ付其儘夜不帰、」

(註：柴山氏夫婦は不明だが、懇意の上客であろう。岸田氏は東京日日新聞に主筆として迎えられる前の岸田吟香のこと。楠山氏は東京新橋竹川町の写真画問屋・楠山秀太郎のこと。石野清七は明治初年に東京の新富町で開業していた写真師で、独立した横山松三郎の弟子の一人であろう。「横浜石野清七」とあるので最初は横浜で開業していたと思われる)

「第三月四日 終日時雨

一、第十時過宮下事務局へ行、月々五拾円ツ、八ヶ月ニ上納致度旨之歎願書持参致し候所、月割上納なと申事ハ逆も難出来候間、早々返納可致、万一反納難出来候ハ、司法省へ可差出旨被申聞、嘆願書御差戻ニ相成候間、無抛退局致し第十二時前帰ル、○同時過三戸氏来リ、富岡景色(製糸所)写真四ツ立判望人有之間、出来合無之候ハ、早速出来致し呉候様御頼ニ相成、昼飯出ス、午後第二時頃帰ル、○同五時半頃西田氏方郵便来ル、過日先生金子御持参ニ相成候礼厚く申来ル、○吉五郎第七時過来ル、○松蔵終日不帰、」

「第三月五日 晴

一、第七時前松蔵帰ル、○右同時過宮下無抛用事(私用)ニ而青石横町へ行、第九時過帰ル、○お蝶殿[午後]第一時過神戸氏御出、○第十時頃青山氏頼ニ付出写之暗室并タントスコツプ玉一組、銀次郎製之目鏡箱貸遣ス、且午後第一時頃、今日製造仕上ケ之三本足一組貸遣ス、

○午後第四時過中清来ル、菓子・茶出ス、同人差当り金子百円入用之義出来候旨、待合有之候ハ、百円時借致し度旨申出候ニ付貸遣ス、右引当之證として金時計一ツ鎖共預リ置、印書一通受取置用書袋ニ入置、同人同第五時過帰ル、○内田氏第五時頃来ル、同第五時半頃帰ル、右同人江研硝子五枚貸遣ス、○午後七時過おてふ殿御帰リ、○今夜方諸機械取調并取片付として大掃除始る、」

「第三月七日 晴

一、第八時宮下事務局へ行、過日四日之通又候歎願候得共、更ニ御聞濟無之ニ付、無抛引取第十二時半頃帰ル、○吉五郎女房きよ弟 帰ル、○午後第四時頃松崎氏来ル、同時過頃蛭子氏御出、菓子・茶出ス、夕飯モ出ス、同第七時半頃蛭子氏御帰リ、同時過松崎氏帰ル、○同第六時頃善太郎来ル、過日普請之作料一両払(受取)過ニ相成、申訳無之旨申出、明日方来リ細工場ニ致ス所之窓拵可申候間、見之内ニ而金子御引可被下と申出候、右人無程帰ル、○同第六時過岩吉来リ、過日内田氏方被頼同人江沙汰致し候ニ付、同氏へ行、大流之註文受合候旨申出、無程帰ル、○同第二時頃岩村方弟子来リ、」

(註：松崎氏は松崎晋二のこと。蛭子氏は蛭子末次郎のこと)

「第三月八日 曇

一、第九時頃大山・宮下私用ニ而外出ス、宮下午後第三時帰る、○第十一時頃楠山氏・亀井氏来ル、両氏へ昼飯出ス、午後第一時頃両氏先生御同道ニ而外出ス、○第八時過武助私用ニ而外出ス、○おてふ殿、竹藏を供ニ連[午後第一時頃]御外出、同第五時半過御帰リ、○彦太郎第九時過私用ニ而外出ス、○吉五郎午後第三時半頃私用ニ而外出ス、○善太郎弟子一人召連来リ、終日細工ス、尤カムロ之床張致ス、○同第五時青山氏へ兼而貸置候暗室ニ、タントスコツプ写真玉・三ツ足帰ル、○中清方硫酸・硝酸一升ツ、持参ス、第十二時過なり、○先生[同]第七時過御帰リ、○武助第九時頃帰ル、荷持一人召連れ夜泊ス、○例之通、休日ニ付先生より一同へ午(昼)ニ而御酒被下候、」

(註：楠山氏は東京新橋竹川町の写真画問屋・楠山秀太郎のこと。亀井氏は亀井至一のこと。おてふ殿は横山松三郎の妻・蝶)

「第三月十一日 雪

一、第七時頃、吉五郎・おきよ并取揚ば、(取上婆)来ル、おてふ(蝶)様履帯御祝有之、○第八時頃おきつ様・おけい様・おてふ様・啓次郎殿・女髪結兩人・蛭子氏御一同ニ築地芝居へ御出被成候、○第七時半頃宮下、蛭子氏御宅へ行、夫方武田氏へ廻ル、右氏今日出勤無之ニ付、明々後十三日第十時陸軍兵学寮第一舎へ出頭御用之趣承り合候様有之、○午後一時過吉五郎私用ニ而外出ス、○同時頃会主画師永濯之ちらし、過日先生へ来リ居ニ付、右御名代として金一円持参ニ而大山寿楼へ行、○午後第四時三十五分西田氏より郵便ニ而書状来ル、其意過日写真致し事并おけい様滞留之礼等なり、○おきつ様・おけい様御泊、○午後第九時大山帰ル、○芝居へ御出ニ相成候方ニ、同第九時頃御買リ、」

(註：おてふ殿は横山松三郎の妻・蝶、啓次郎殿は横山松三郎の妹・千代の次男で慶次郎といい、松三郎の養子となった。蛭子氏は蛭子末次郎のこと。武田氏は武田斐三郎のことで、緒方洪庵や佐久間象山から洋学などを学び、箱館戦争の舞台として知られる洋式城郭「五稜郭」を設計・建設した人。明治政府時代からは成章(しげあきら)の名を使った)

(※「方」は平仮名の「よ」と「り」の合字)

(森重和雄)